茨城大学教育実践研究 26(2007), 169-182

中学生からみた親子関係

――親に対する自己抑制を中心に――

松本千裕*・守屋英子**

(2007 年 9 月 28 日受理)

Parent- child relationship of the junior high school student:
Focused on self-control toward the parents

Chihiro MATSUMOTO* and Eiko MORIYA**

キーワード：親子関係，自己抑制，よい子，家族関係単純図式投影法

本研究では，中学生からみた親子関係や家族関係について，親に対する自己抑制の視点から検討することを目的とし，中学生の親に対する自己抑制の程度と親子関係の捉え方を調べ，それらの関連を分析した。また，面接を通して，より個人的な中学生の親や家族に対する想いを聴き，実際に家族の中でどの程度自己抑制を行い，どのような理由から自己抑制を行っているのかを，「よい子」の視点を踏まえて考察した。中学生 78 名に対し，親に対する自己抑制尺度(10 項目)，筆者が独自に作成した 3 項目(自由記述式)，家族関係単純図式投影法への回答を求めた。面接調査は中学生 9 名に対し行った。分析の結果，中学生は 10 項目中 2 項目以外では親に対する自己抑制を行っていないことが示された。家族単純図式投影法では，現実の家族図式では 4 つ，理想の家族図式では 5 つの家族図式パターンが見出された。また，親に対する自己抑制尺度と家族図式との間に相関はみられなかったが，父母の距離と父子の距離において，理想の家族図式とのギャップが大きい群は，抑制尺度得点が有意に高いことが示された 。自由記述や面接の結果からは，親に対して自己抑制をしている様子が示され，自己抑制をする理由には「良い子」としての存在がうかがえた。

問題と目的

近年，子どもの状況について“言動が粗暴になっている”“自己中心的である”“親の前ではよい子に変身する”などが言われている(児童心理，2001)。これらのことは今の中学生を見ていて感じることでもあり，その中でも“親の前ではよい子に変身する”ということが気になった。それは，中学校の相談室で親に自分の辛さを訴えることは「申し訳ない」と語る生徒に出会い，その時，筆者の頭には「よい子」という言葉が浮かんだからである。よい子の背景には，親子関係や家族関係

* 常葉学園短期大学学生相談室　**茨城大学大学院教育学研究科

の問題があるとされ，よい子が不適応問題を起こした例は多くの文献で述べられている。山川(2002)はよい子を「自分の感情よりも周囲からの期待を重視して，評価が高くなるように振る舞う子」と定義している。このことから，自分の感情よりも周囲の期待を尊重したとき，自分の欲求は抑制され，抑制したものが一気に溢れ出た時に，何らかの問題行動を起こすのではないかと考えた。さらに，山川(2002)はよい子の問題点として，①他者志向と自己志向のバランスを失くしている，②自分が何をしたいと思うことが仮にあったとしても，そのしたいことが，親や教師が良い顔をしないであろうと予測できることであれば，そのしたいことを押さえ込む強い抑制力を，自己内部に生じさせることができることを挙げている。また，よい子は，この抑制力を発揮することが，親や教師から期待されているだろうと考えてしまうために，それを実行してしまうとしている。抑制するということは，その前に自分の欲求が生じてきているわけであり，その欲求が親や教師の望むものではないと判断されたためである。このようにして抑制されたものが自分の中にどんどん蓄積され，その容量がいっぱいになってしまったとき，不登校などの様々な問題行動として現れるのではないだろうか。また，抑制を意識せずに自然と行っている子どももいるだろう。氏原(1985)は，3,4歳くらいの一人っ子の下に赤ん坊が生まれたことを例に，その子どもが赤ん坊を憎いという感情を抑圧していく過程を説明している。以下，要約しながら述べる。赤ん坊の誕生によって母親の関心が赤ん坊に移り，この子どもは赤ん坊に対して敵意に近い感情を持つが，この子どもが赤ん坊に対する敵意を少しでも示すこと(例えば叩くなど)は母親からの叱責をよび，母親の愛情や保護を失うことに繋がり，それは致命的である。そのため，子どもは自然に生じてくる赤ん坊への感情に気がつかないようになっていくが，自然に生じた感情をしっかりおし殺すことは不可能である。だが，自然な感情の流れに身を任せることは，次第により大きい不安を招くことになるため，悪しき衝動にはっきり気づく前に感情の流れを断ち切らねばならない。こうして，子どもの中に生じた自発的な感情の流れは，「悪しき衝動」として抑圧され，子ども自身にも気づかれることがなくなっていく。同じような過程で，母親の期待に沿わない自然な心の動きは，いずれも何らかの不安をひき起こし，何らかのまじない的行為によって抑圧される。しかし，その不安がなくなることはないため，子どもはその不安を解消するために，母親ないし母親を通して伝えられる社会の基準に，自発性の喪失という犠牲を払いながら一層自分を合わそうとする。合わせることで母親や周囲からの称賛や是認を受けることで安心する。このことから，幼児の頃から自己抑制を行い，それを意識しないで行える子どもがいるであろうことが推察される。

上で述べてきた自己抑制は，自己抑制を否定的な面から捉えていたが，柏木(1986)が述べるように，自己抑制は自分のいる環境に適応するためには必要であり，また仲間との協調性につながる大切なことであるとも考えられる。行っている自己抑制が否定的な側面で語られるか，肯定的な面で語られるかは，自己抑制を行っている理由によると思われ，相談室で出会った生徒の「申し訳ない」という理由の他に，どのような理由で中学生は抑制を行っているのかについて，抑制を行っている中学生本人の言葉でそれを知ることは，中学生の親子関係を理解する上で，意味があると思われる。

そこで筆者は中学生が親に対してどの程度自己抑制を行っているか，またその理由について調べるために，木村(2002)が中学生を対象に作成した親に対する自己抑制尺度を質問紙として用いることにした。さらに、抑制した後の気持ちやその気持ちの落ち着け方を聞くことで，親に対する自己抑制が子どもにとってどういうものであるのかを明らかにしたいと考えた。また，子どもは親との

関係だけでなく，きょうだいや祖父母，両親同士の関係の中にもいる。こうした自己抑制を行う中学生の背後にはどのような親子関係・家族関係が存在しているのかを調べるために，中学生がそれをどのように捉えているのかを検討することにした。家族関係は言葉で置き換えることが難しい(築地,2005)ことから，質問紙法以外の方法として家族関係単純図式投影法(水島,1978)を用いることにした。それは，①描画を苦手とする生徒は描画法に抵抗を示すことが考えられ，描画が苦手な生徒でも取り組み易いと思われること，②家族関係単純図式投影法は実施方法が簡単で初心者でも行なえる(草田，2001)こと，③親子関係と家族関係の両方を把握することができ，なおかつそのデータを量的にも質的にも分析できるという，以上 3 点の理由からである。また，家族関係単純図式投影法は，作品について生徒と筆者の間で話し合うことにより最終的に完成となるため，生徒と面接をして話す機会を作ることでより個人的な中学生の親や家族に対する想いを聴き，中学生からみた親や家族の捉え方についての理解を深めることにした。

方法

１．質問紙調査

(1)調査対象：中学生 78 人を対象に行った。平均年齢は 13.1 歳（SD＝1.01 歳）。

(2)実施方法：学年ごと大教室に集まり，その場で回答，回収した。調査時期は 2006 年 7 月下旬。

(3)質問紙の構成：①親に対する自己抑制尺度：木村(2000）の親に対する自己抑制尺度 10 項目について,「全くそうしていない(1 点)」から「いつもそうしている(6 点)」までの 6 件法で回答を求めた。質問項目については Table1 に示す通りである。この尺度は，臨床的考察において，青年の自己抑制が不適応を引き起こす事例に注目し，中学生を対象に自己抑制傾向を測定するために作成された尺度である。

Table1：親に対する自己抑制尺度の質問項目

1.親におこられるのはいやだから，おこられないよう気をつけている。
2.親がそばにいる時は，騒ぎたいことがあってもがまんしている。
3.親にものごとを頼まれたら，ことわることができない。
4.親にいやなことを言われて腹が立っても，がまんしている。
5.親にきらわれるのがいやなので，きらわれないようにしている。
6.親の前では，言葉づかいや行動に気を配っている。
7.親の言うことには，何でもしたがうようにしている。
8.親が自分のことをどのように思っているのか気になる。
9.親の期待にこたえられるように，無理をしてでもがんばる。
10.親に対して，自分の思っていることを素直に言えない。

②自由記述：木村(2000)の親に対する自己抑制尺度の中から 1 項目を選んでもらい，筆者が独自に作成した質問(①選んだ質問のようにするのは，どうしてだと思いますか，②選んだ質問のように

するとき，どのような気持ちになりますか，③②で答えた気持ちをどのように落ち着けますか)に自由記述で回答を求めた。

③家族関係の査定：水島(1978)が考案した家族関係単純図式投影法を用いた。これは，直径12㎝の円が描かれたB5判の台紙に一円玉台の家族成員に見立てたコマを配置して，現実や理想の家族関係を図式化し，それらを視覚的に捉えようとするものである。現実の家族図式と理想の家族図式について図式化してもらい，各家族図式についての簡単な説明や感想も求めた。教示や実施方法は，草田(1996,2002)を参考にした。

2. 面接調査

(1)調査対象：　質問紙調査の際に面接への協力を依頼し，応じてくれた中学生9人を対象とした。

(2)実施方法：　中学校内の相談室で，昼休みや放課後を利用して，一人あたり10分～20分程，半構造化面接を行った。実施時期は，2006年10月～12月中旬。

(3)質問内容：　被面接者全員に共通した質問（①親と言われたときに父親と母親のどちらを思い浮かべるか，②自分にとって親とはどのような存在か，③家族全員が同じ場所に集まっているときの居心地はどうであるか，④現実と理想の家族図式では，“私”はどの方向を向いているか）を用意した。その他，質問紙調査の結果から筆者が気になる回答について，個別に質問を用意した。

結果と考察

1. 親に対する自己抑制

(1)自己抑制尺度

10 項目の合計得点を尺度得点とした。尺度得点の平均点(SD)は，30.07(10.75)点，最高点は 59 点，最低点は10点であった。

Table2：親に対する自己抑制尺度の各質問項目の平均点(SD)

質問項目	平均点(SD)
1.親におこられるのはいやだから，おこられないよう気をつけている。	3.52(1.58)
2.親がそばにいる時は，騒ぎたいことがあってもがまんしている。	3.00 (1.61)
3.親にものごとを頼まれたら，ことわることができない。	3.08(1.36)
4.親にいやなことを言われて腹が立っても，がまんしている。	3.46(1.58)
5.親にきらわれるのがいやなので，きらわれないようにしている。	2.88(1.58)
6.親の前では，言葉づかいや行動に気を配っている。	2.79(1.52)
7.親の言うことには，何でもしたがうようにしている。	2.88(1.51)
8.親が自分のことをどのように思っているのか気になる。	2.80(1.78)
9.親の期待にこたえられるように，無理をしてでもがんばる。	2.90(1.41)
10.親に対して，自分の思っていることを素直に言えない。	2.84(1.58)

平均点が 3 点以下の質問項目については，全体的に抑制していない方に回答が多かったと考えられる。質問 1,4 以外は抑制していないとの回答が多く，質問 1（親におこられるのはいやだから，おこられないよう気をつけている）,4（親にいやなことを言われて腹が立っても，がまんしている）は抑制しているとの回答がやや多かった。(Table2 参照)

(2) 自由記述

①抑制する理由，抑制しない理由

親に対して自己抑制をする理由について，「怒られるから」「長く説教するから」等の『怒られる等，後でよくないことが起こるから』(35%：回答した生徒の割合を示す)という理由を挙げた生徒が最も多かった。その中で，「親が怒るのがいやだから」と答えた生徒がおり，この生徒は抑制するという選択肢しか持っていない印象を受けた。この生徒は「親が怒るのがいやだから」怒られないように気をつけ，そのときに「いやな気持ち」を感じており，それを落ち着けるために「そんなこと，気にしない。と思う。もっと，つらい人もいるんだ。と思う」と自分に言い聞かせている。この生徒の抑制尺度得点は 50 点で平均を 20 点ほど上回るものであった。親が怒るのは，子どもが親の望まないことをするからであり，親の望まないことはしないというのはよい子の問題点とされていることから，この生徒はよい子であると考えられ，よい子としての自己抑制を行っていると言える。

他には，「親に余計な心配をさせたくないから」「親が望んでいることをうらぎりたくないから」等の『親のことを気遣って』(20%)があった。この理由を挙げた生徒もよい子ではないかと思われる。実際にこの理由を挙げた生徒自身が抑制しているときの気持ちを「いい子に変身した感じ」と答えており，庄司・林田(2003)が，よい子は自分の欲求や意志よりも他者の欲求や意志を優先させ，選択すると述べていることにも当てはまると思われる。

親に対して抑制していない理由としては，「親が正しいことばかり言ってないと思うから」「親がむかつくから」等といった『親への反抗的態度から』(20.5%)が最も多かった。次いで，「別におこられないから」や「別にがまんなんてしない」等の『親の反応を気にしていないから』(17.6%)が挙げられた。他には，『親との仲がいいから』(11.7%)などという理由が示された。

②抑制したとき，または抑制しなかったときの気持ち

抑制したときの気持ちとしては，『むかついたり，いらいらする』(20%)回答と，『特に何も感じない』(20%)という回答が同程度みられた。その他，『不安』(10%)，『つらさ』(5%)，「息ぐるしい？」，「望みをかなえられてうれしい」，「自分がいい子に変身した感じ」などの回答がみられた。このような，『不安』や『つらさ』等の気持ちになるのは，氏原(1985)が述べるように，自然に生じてくる感情(抑制される感情)をしっかり押し殺すことが不可能であると考えられる。また，「息ぐるしい」と回答した生徒に面接調査を行うことが出来，息苦しさは「親が傷つくから，親には言い返せない」ために感じることがわかった。この親を傷つけまいとする気持ちが「よい子」としての自己抑制を行うことにつながるのではないだろうか。

抑制しなかったときの気持ちは，『特に何も感じない』(50%）との回答が大半を占めた。その他，『むかついたり，いらいらする』(14.7%)，『楽しい，おもしろい』(8.8%)等の気持ちになることがわかった。

これらの結果を検討していく中で，自己抑制尺度の回答と自由記述の回答にズレを感じさせる生徒の存在に気がついた。それは、自己抑制尺度の質問 6 に対して，親の前では言葉づかいや行動に気を配っていないと回答しているが，そのときの気持ちは「少しもやもやとした気持ち」と回答しており、氏原の指摘から考えると，この回答は抑制をした場合にみられるのではないかと考えられるためである。この生徒は，抑制していない理由を「騒いだらおこられるし，別に騒ぎたいときは，自分の好きなことをすればいいから」としており，騒ぎたい気持ちを好きなことをすることで抑制していることがわかる。つまり，騒ぎたい気持ちをしっかり押し殺すことができないため、上記のような気持ちになると考えられ，このことから，この生徒は無意識に抑制を行っていると思われる。同様に，自己抑制尺度の回答と自由記述の回答のズレから、無意識に自己抑制を行っていると考えられる生徒がいた。この生徒も質問 6 に対し，ほとんど気を配っていないと回答し，その理由を「あたりまえ」と回答していた。この回答は，親の前で言動や行動に気を配ることはあたりまえのことであるから，意識しておこなうことではないという意味として読み取ることができる。この「あたりまえ」という理由は，すでに身についた行動になっていると考えられ，その時の気持ちを「なにもかんじない」としていることから，無意識に抑制を行っていると言えるだろう。このような抑制を無意識に行っている生徒の存在は自己報告式の質問紙では捉えることが出来ないため，そのような生徒を捉えられる方法を用いる必要があることが示された。

③気持ちの落ち着け方

抑制群の気持ちの落ち着け方としては，「音楽をきく」等の『好きなことをする』(25%)という回答が最も多かった。その他，『時間にまかせる』(15％)，『寝る』，『ボーっとする』(共に 7.5%)，『期待に応える』（7.5%）との回答がみられた。『期待に応える』と回答した生徒の中には，「いつも世話になっている」という理由から「少しつらい気持ち」になっても「よい結果を出す」ことで，その気持ちを払拭しようとしている生徒がいることが示された。また，「ほめられるとうれしいから」という理由で，「やる気になる」ので期待に応えようとする生徒の存在も明らかになった。これは，庄司・林田(2003)が，期待に応えてくれた子どもに対する周囲からの賞賛や満足が，よい子の傾向をさらに強化すると述べていることから、この生徒は親から褒められることが励みになり、新たなやる気を生み出し，親の期待に応えるような結果を出し，親から褒められ･･･ということが繰り返されていくことが予想される。抑制しなかった場合の気持ちの落ち着け方は，『特に何もしない』(44.1%)が最も多く，『好きなことをする』(14.7%)が次に多かった。

2. 家族図式

(1)家族図式

先行研究と同様，本研究でも分析の対象を被験者本人，父，母の 3 者に限定した。現実と理想の家族図式における，父母の距離，父子の距離，母子間の距離の平均と分析結果を Table3 に示した。いずれの距離においても，現実よりも理想の家族図式の方が，家族成員間の距離は近いことが示された。このことから，中学生は 3 者間の距離が近い家族関係を理想としていることがわかった。

Table3：家族図式における各成員間の距離の平均(SD)と分析結果

距離	現実	理想	t 検定
父母の距離	3.96(2.36)	3.07(1.71)	理想＜現実**
父子の距離	4.01(2.22)	3.11(1.71)	理想＜現実***
母子の距離	3.53(1.84)	3.09(1.76)	理想＜現実†

**p＜.01，*p＜.05

(2)現実の家族図式パターン

現実の家族図式パターンを検討するために，父母間，父子間，母子間のユークリッド距離を求めて，最遠隣法によるクラスター分析を行った。その結果，現実の家族図式は 4 つのクラスターに分類された。各クラスターにおける典型例を Figure.1 に示す。クラスターによって各成員間の距離に違いがあるかを検討したところ，父母，父子，母子のいずれの距離においても有意差がみられたため，多重比較を行った結果，いずれの距離においても 2 型が最も近いことが示された(Table4)。

Table4：現実の家族図式パターンにおける各成員間の距離の平均(SD)と分析結果

類型	1 型	2 型	3 型	4 型	F 値	多重比較
父母	4.14(1.60)	2.70(0.86)	6.80(0.56)	8.86(1.28)	72.694***	2＜1＜3＝4*
父子	5.11(1.40)	2.78(1.12)	4.30(0.28)	6.95(1.85)	31.672***	2＜1＜4*
母子	4.66(1.62)	2.50(0.78)	8.85(1.48)	4.68(1.63)	33.933***	2＜1＝4＜3*

***p＜.001，*p＜.05

1 型はやや 3 者間に距離を保ち，父母の距離は比較的近く，本人は父母から離れているのが特徴である。家族図式に対する自由記述では，「私と兄はとても仲が良い。母や父とも仲は良いのだけども兄ほどではない」など，父母との仲の良さよりも他の家族成員との仲の良さを示すものが多くみられた。2 型は全クラスターの中で最も 3 者間の距離が近かった。被験者の家族図式に対する自由記述からも家族全員の仲の良さを表していることが示された。一般的に，家族成員間の距離が近い場合は，家族の親密性，連帯感，情緒的むすびつきが強いといわれている(草田，2002)ことから，3 者間の距離が近い 2 型の家族図式を作る生徒は，家族は親密で，まとまっており，情緒的なつながりも強いと認知しており，家族関係は比較的良好であると思われる。3 型は父母の距離は遠く，他のクラスターよりも母子の距離が離れていた。自由記述では，「母は家族とは言えません」と「姉，母はかげながら自分を支えて，父は全体に支え，」というように反対の表現がみられた。4 型は，父母の距離と父子の距離が最も遠く，片方の親(主に父親)が孤立している様子や家族の中にグループが出来ている様子が示された。一方の親と子が近接し，他方の親が遠くに配置されている 3 型や父母の距離がかなり離れている 4 型のような類型は，家族の病理性を反映すると考えられ(草田，1996)，家族の健康度の低さを表す典型的な家族図式パターンであることが指摘されている（草田，1995)。今回，父母の距離が離れている 4 型の家族図式を作成した生徒と面接を行うことが出来，その中で，家族と一緒にいるときの居心地の悪さや，父親が妹のみを可愛がること，夫婦関係がやや悪いこと

が語られた。また，学校で怒って机を倒すなど，学校で暴れたことがあったことも語られ，学校生活への適応に問題がみられる。西出・夏野(1995)の家族システムの機能状態と子どもの学校適応感についての研究では，子どもが家族を肯定的に評価していれば，学校適応感も高まることが示された。ゆえに，この生徒の学校生活への適応に問題がみられる理由として，現実の家族図式に示されたように父親が妹をかばい過ぎることで家族のバランスが崩れていることがこの生徒の家族の評価を下げ，その結果，この生徒の学校適応感が低くなっているのではないだろうか。

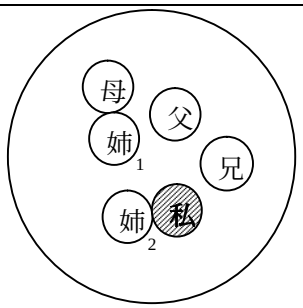
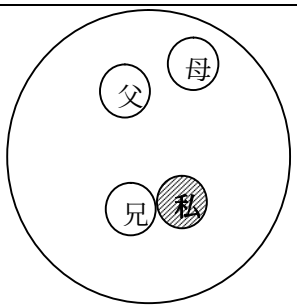
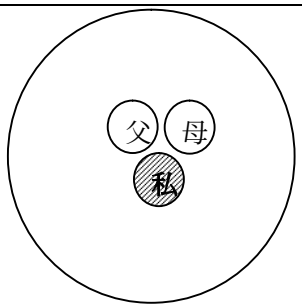
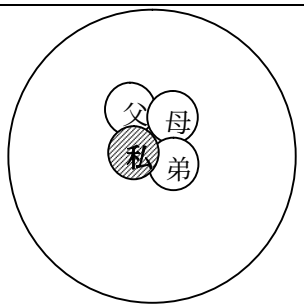
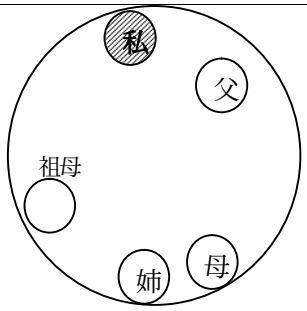
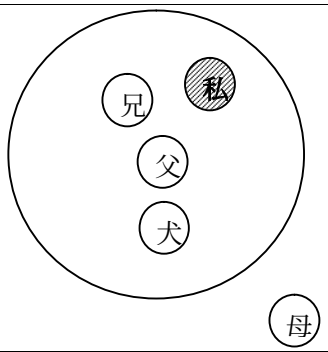
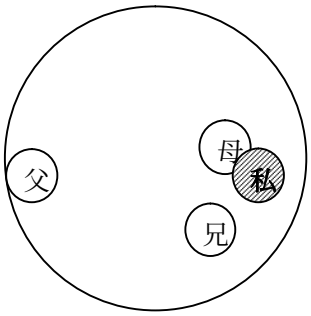
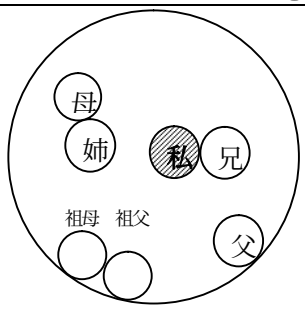
1型	 [自由記述] 私と姉2はとても仲がいいし，姉1と母は仲がいいから，父と兄はびみょうな感じになった。	 [自由記述] 私と兄はとても仲が良い。母や父とも仲は良いのだけども兄ほどではない。
2型	 [自由記述] みんな仲が良い。	 [自由記述] みんな同じくらいなかがいい。
3型	 [自由記述] 姉，母はかげながら自分を支えて，父は全体に支え，祖母はいろんなところから見ている。といった感じ。	 [自由記述] 母は家族とは言えません。父を中心として，我が家計は成り立っています。
4型	 [自由記述] パパこりつ中。	 [自由記述]なんとなく。仲が良い人同士？

Fig.1　現実の家族図式パターンの典型例と自由記述

(3)理想の家族図式パターン

理想の家族図式パターンを検討するために、現実の家族図式と同様に各成員間のユークリッド距離を求めて，最遠隣法によるクラスター分析を行った結果，理想の家族図式は，5 つのクラスターに分類された。各クラスターにおける典型例を Figure.2 に示す。さらに，クラスターによって各成員間の距離に違いがあるかを調べた結果，父母，父子，母子のいずれの距離においても有意な差がみられた。多重比較の結果，父母の距離と父子の距離においてはⅠ型とⅢ型が最も近く，母子の距離においてはⅠ型が最も近いことが示された。また，いずれの距離においてもⅤ型が最も遠いことが示された。Table5 に理想の家族図式パターンにおける各成員間の距離と分散分析の結果を示す。

Table5：理想の家族図式パターンにおける各成員間の距離の平均(SD)と分析結果

	Ⅰ型	Ⅱ型	Ⅲ型	Ⅳ型	Ⅴ型	F 値	多重比較
父母	2.36 (0.66)	4.48 (0.72)	3.17 (0.99)	4.62 (1.35)	8.00 (0.56)	47.313***	Ⅰ＝Ⅲ＜Ⅱ＝Ⅳ＜Ⅴ*
父子	2.55 (0.83)	2.73 (0.64)	4.25 (0.33)	7.02 (0.32)	9.70 (0.98)	68.895***	Ⅰ＝Ⅱ＜Ⅲ＜Ⅳ＜Ⅴ*
母子	2.29 (0.57)	3.36 (0.85)	5.92 (0.39)	4.50 (1.11)	8.40 (1.69)	72.113***	Ⅰ＜Ⅱ＜Ⅳ＜Ⅲ＜Ⅴ*

***p＜.001,*p＜.05

Ⅰ型は，他のクラスターと比べて，最も 3 者間の距離が近いのが特徴である。自由記述にも家族のまとまり，仲のよさが示されていた。Ⅱ型は，Ⅰ型よりも 3 者間に距離があり，父母の距離がやや離れている。これは，父母の間に被験者本人が入り，同一直線上に 3 者が配置されたためである。自由記述は家族の仲の良さを表現するものと，家族成員同士が距離を取り，お互いを尊重する内容や自立を示す内容がみられた。Ⅲ型は，父母の距離は近いが，本人は父母から離れたところに配置されていた。自由記述には，家族の円満さや平等さを表すものがみられた一方，「なんかみんな仲良し。自分は少し」という記述もあった。Ⅳ型は，被験者本人と父親との距離が，父母や母子の距離と比べて離れている。自由記述には家族成員間各々の自立と尊重を示すものが記されており，否定的意味の記述は少なかった。Ⅴ型は，他のクラスターと比べて 3 者間の距離が最も離れており，家族の枠に沿って配置されていた。自由記述をみると，否定的意味は感じられなかった。

本研究の結果は，3 つのパターン(Ⅰ型：3 クラスター中，最も父母の距離が離れている，Ⅱ型：父，母，私の 3 者が最も密接している，Ⅲ型：父母の距離が近く，親子の距離が離れている)に分類された草田(1996)の研究とは異なる結果であった。本研究で示されたⅣ型，Ⅴ型は，水島ら(1991)の大学生を対象とした研究に示されたⅣ型(親からの独立を課題として意識しているもの)，Ⅴ型(3 者とも距離が非常に遠く，家族の枠の円周にそって配置されている)と同じであった。

このように，青年期後期に位置する大学生と思春期に位置する中学生では発達段階が違うにもかかわらず，同じ結果が得られたことはとても興味深い。ただ，本研究においてⅣ型の家族図式を作成した生徒(Ⅰさん)に面接を行ったが，その生徒は，反抗期は過ぎたが，母親や父親は自分を産ん

Ⅰ型	父 母 兄 私 姉 [自由記述] みんなが仲のよい家族。	私 弟 母 父 [自由記述] みんなが同じように仲が良く, 考えのへだたりもない。
Ⅱ型	父 妹1 私 妹2 母 [自由記述] みんな仲良し。	私 妹 父 母 妹 [自由記述] 近いほうがいいから。
Ⅲ型	祖父祖母 母 父 姉 私 [自由記述] みんなおなじたかさ。	父 母 妹 祖母 私 [自由記述] なんかみんな仲良し。自分は少し。
Ⅳ型	父 姉 母 私 [自由記述] お互いに距離をおきながらも, お互いを気にし合っている。	父 母 兄 私 [自由記述] 全員が適当な(妥当な)距離を置く。
Ⅴ型	父 妹 私 母 [自由記述] 妹を中心として他の 3 人のバランスがとれている。	私 弟 母 父 [自由記述] 家族だれともたいとうなかんけい。

Fig.2　理想の家族図式パターンの典型例と自由記述

でくれた存在，生活を補ってくれる存在で，母親も父親も人間的には好きではないと語っており，水島ら(1991)らの研究によって示されたⅣ型とは内容がずれているように感じられた。青年期は親からの精神的自立が重要な課題であり，時間をかけてそれを達成していくことが求められる時期(丸茂，2000)とされており，本研究でⅣ型，Ⅴ型の図式を示した生徒は，親からの独立を少し急ぎすぎている印象を受ける。

(4)現実と理想の家族図式の関係

4 つの現実の家族図式パターンのうち，どのパターンを示した中学生が家族成員間の距離において，理想の家族図式との間の差が大きいかを調べた。その結果，父母，父子，母子，いずれの成員間の距離においても，クラスター間に有意な差がみられ，多重比較を行った。その結果，現実の家族図式において父母の距離が遠かった 3 型と 4 型の生徒は，理想の家族図式では父母の距離を近くに配置したことが示された。また，現実の家族図式において父子間の距離が遠い 4 型の生徒は理想の家族図式では父子の距離を近くに配置したこと，母子の距離が遠い 3 型の生徒は母子の距離を近くに配置したことがわかった。このことから，3 型と 4 型の生徒が現実と理想の家族関係の間で最もギャップを感じているであろうことがわかった。ギャップを感じているということは現実の家族関係に満足していないことを示していると考えられ，これらのことから 3 型と 4 型を示した生徒は現実の家族関係に満足していないと言えるだろう。Table6 に分析結果を示す。

Table6：現実の家族図式パターンにおける理想の家族図式とのギャップと分析結果

距離	1 型	2 型	3 型	4 型	F 値	多重比較
父母	1.57(1.11)	0.81(0.85)	3.50(1.27)	4.30(2.99)	10.99***	2=1<3=4*
父子	2.16(1.60)	1.04(1.16)	1.65(0.49)	4.15(2.48)	9.99***	2=3<1<4*
母子	1.91(1.63)	0.91(0.93)	5.15(3.32)	1.95(1.14)	17.70***	2<4=1<3*

***p<.001，*p<.05

3. 親に対する自己抑制と家族図式との関連

抑制尺度と家族図式の相関係数を求めた結果，抑制尺度得点と各家族図式の成員間の距離との間に有意な相関はみられなかった。Table7 に抑制尺度得点と現実と理想の家族図式の各成員間の距離の相関係数を示す。

Table7：抑制尺度得点と各家族図式の成員間距離との相関

	現実			理想		
	父母	父子	母子	父母	父子	母子
抑制得点	.187	.160	-.118	-.074	-.026	-.152

自由記述において，抑制を行うことによって『むかついたり，イライラする』気持ちになることが示されたことから，現実の家族関係が満足のいくものではないことが想像され，自己抑制と現実と理想の各成員間の距離の差の間に，何らかの関連があるのではないかと考えた。そこで，現実と理想の家族図式の各成員間距離の差が大きい群と小さい群に分け，両者の自己抑制得点を比較した結果，父母の距離と父子の距離において，現実と理想のギャップが大きい群の方が，ギャップが小さい群よりも，自己抑制尺度得点が有意に高いことが示された。このことから，父母の距離を遠くに配置した生徒と父子の距離を遠くに配置した生徒の現実の家族関係は満足のいくものではなく、そのことが自己抑制をすることに繋がる可能性が示された。Table8 に現実と理想の各成員間の距離の差が小さい群と大きい群における自己抑制尺度得点と t 検定の結果を示した。

Table8：現実と理想の各成員間の距離の差における自己抑制尺度得点(SD)と分析結果

	小群	大群	t 検定
父母の距離	25.58	33.26	小群＜大群*
父子の距離	29.65	37.50	小群＜大群*
母子の距離	29.78	30.64	n.s.

*p＜.05

4. 面接から明らかになったこと

9 人の生徒に面接調査を実施した。親と言われたときに，父親と母親のどちらを思い浮かべるか，という質問については，5 人の生徒が「母親」と答えており，その理由には，父親に比べ母親とは一緒に過ごす時間が長いことが挙げられた。また，父親と回答した理由に，「優しい」や「一緒に楽しい時間を過ごすから」というものがみられたことから，しつけは母親中心に行われている様子が想像される。次に，親をどのような存在として捉えているかについては，「時には尊敬し，時にはちょっといやな存在」というように親の両面を捉えた回答が 3 人と最も多かった。他には，生き方（しつけ）を教えてくれる存在，人生の先輩，鏡となる存在のように，自分のモデルとしての存在と捉えている生徒や，人生を見守っていくような存在，頼りになる存在のように，安心感となる存在として捉えていることがわかった。

家族全員と一緒にいるときの居心地については，よいときもあれば，悪いときもあるという意味で「どちらとも言えない」と答えた生徒が最も多かった。「(家族全員で揃うときはないから)わからない」と答えた生徒もいた。また，居心地が「「よい」と回答した生徒の現実の家族図式のコマは，「悪い」と回答した生徒の家族図式のコマよりも円の中心の近くに配置され，家族成員間の距離が近い印象を受ける。草田(2002)によって，家族成員間の距離の近さと，家族の親密性，連帯感，情緒的結びつきの強さとの関係が指摘されていることから，居心地のよさには家族の親密さ，連帯感，情緒的結びつきの強さという要素が含まれており，居心地が「よい」と回答した生徒の家族図式の成員間の距離が近くなったと思われる。次に，現実と理想の家族図式における“私”のコマの向きについては，一人の生徒以外，“私”のコマはいずれかの家族成員の方を向いていた。いずれの家族成員の方も向いていなかった生徒は，「姉の方を向くのだが，かまってもらえず寂しいので，枠外(友

達)に目を向ける」と述べていた。また，現実の家族図式では，“私”は自分をかばってくれたり，味方になってくれたりする家族成員の方向しか向いていない生徒が多かったが，理想の家族図式では，家族全員の方を向くことや家族全員が同じ方向(円の中心)を見つめる様子が示された。このように，コマの向きからも中学生は１つにまとまっている家族を理想としていることが示された。しかし，本来の家族図式投影法にはコマの空間配置や視線の方向についての解釈の指標はないため，今回の結果の解釈は十分とは言えず，今後，これらの解釈についての指標の開発が求められる。

また，今の中学生の家族関係には，共通して見られるパターンがいくつかあることがわかった。それは，①父親と母親の役割の入れ替わりが生じている，②子どものスケジュール管理を母親が行っている，③親の都合（忙しいなど）で親に頼ることができないために同胞(姉)に頼る，などの特徴を持った家族関係である。また，面接の中で父親についての語りが少なかった生徒もおり，家庭での父親の存在の薄さを感じさせ，このことも今の中学生の親子関係には共通してみられるパターンと考えられる。また，家族を一般論で語る生徒と大人を客観的に見る目を持っている生徒からは，そのようにすることで家族の事柄に対して感情的になることを避けている印象が感じられた。

終わりに

本研究は、中学生の親子関係について親に対する自己抑制を中心に検討を行い、それらを「よい子」の視点から考察した。その結果、『親のことを気遣って』という理由で自己抑制を行う生徒は「よい子」である可能性が示唆された。さらに、無意識に自己抑制を行っている生徒の存在も見出され、この生徒も「よい子」として捉えることができるだろう。

また、家族図式表現された中学生の現実と理想の家族関係パターンを分析した結果、現実の家族関係は４つ、理想の家族関係では５つのパターンが見出された。示された家族図式と自由記述は対応するものであったことから、家族関係単純図式投影法は中学生にとっては有効な指標になりうることがわかった。しかし、家族関係単純図式投影法には、コマの視線の方向についての指標や空間配置についての指標がないことから、それらの指標の開発が求められる。また、本研究でも先行研究においても、家族成員全てを含む家族図式の作成を求めながらも、分析対象を被験者本人，父，母の３者に限定している。親子関係，家族関係の理解を深めるためには、その他の成員との関係についても検討することが必要であろう。

最後に，本研究のために，調査にご協力頂いた生徒の皆様ならびに先生方に心より感謝いたします。

引用文献

人づくり21世紀委員会　2001　意見や気持ちを伝え合える親子関係づくり―京都市の取り組みから　児童心理，86-91.

木村朋子　2000　中学生の自己抑制に関する基礎的研究‐親に対する自己抑制の観点から‐　日本

青年心理学会大会発表論文集，p.52.
小西・黒川　2000　親子のコミュニケーションが中学生の「心の健康度」に及ぼす影響　日本家政学会誌，51(4)，273-286.
草田寿子　1995　家族関係単純図式投影法の基礎的研究‐家族査定としての可能性‐　カウンセリング研究，28(1)，21-27.
草田寿子　1996　家族関係単純図式投影法の基礎的研究Ⅲ‐家族図式に表現された中学生の家族関係パターン‐　カウンセリング研究，29(3)，208-216.
草田寿子　家族関係単純図式投影法‐家族アセスメントの視点から‐　2002　『人間科学研究』文教大学人間科学部，24，5-10.
丸茂裕子　2000　久世敏雄・齊藤耕二監修　青年心理学事典　福村出版　p.220.
水島恵一　1978　実証的かつ実感的な体験研究の方法とテーマ‐「体験と意識」に関する個別・総合プロジェクトに向けて‐　文教大学紀要，12，1-11.
西出隆紀・夏野良司　1995　家族システムの機能状態が子どもの学校適応感に与える影響に関する一研究　家族心理学研究，9(1)，23-34.
庄司一子・林田和恵　2003　「いい子」傾向をもつ子どものself-controlと対人関係　教育相談学研究，41，49-57.
氏原寛　1985　カウンセリングの実践　誠信書房
山川法子　2002　いわゆる「よい子」に関する事例を通した支援方法についての考察　中部教育学会紀要，2，47-62.